

施工説明書

1. フローリング・パネリング 選定における注意事項

【商品選定の際、確認しておきたいこと】

<使用環境の確認>

下記のような環境では床下などの湿度が著しく上昇する恐れがあります。フローリング材やパネリング材の異常な膨張による不具合が生じる可能性が高くなるため、施工の際には十分な配慮と対策を施してください。条件によっては、無垢木材の使用可否を再検討してください。

- 低湿地や沼地、田んぼに囲まれた場所や海辺。もともと湿度が多い土壌の地域。
- 森林の沢地や、地下水が豊富な場所。
- 床下の換気口が小さい現場。
- 地下室など湿度が高く湿度がこもりやすい場所またはコンクリートが完全に乾燥していない場所。
- 塗り壁やモルタル土間の範囲が広い場所。
- リフォームなどにより床下と地面が300mm以下に近接する場所。

また、現場内での湿度のばらつきの確認も重要です。温湿度を容易に測定できるデジタル温湿度計や木材の含水率を測る含水率計の使用が有効です。

<床暖房について>

床暖房を入れる場合には、床暖房対応フローリングを必ずご使用ください。なお、床暖房対応フローリングをご使用いただけなかった場合の不具合については対応できません。

<直張りについて>

直張りをご検討の場合には、直張り対応フローリング(カルブ貼り)を必ずご使用ください。なお、直張り対応フローリングをご使用いただけなかった場合の不具合については対応できません。

<乱尺フローリングについて>

乱尺フローリングを選択された場合、根太工法でのご使用はできません。24mm以上の構造用合板を使用する根太レス工法を用いてください。

<空調設備について>

エアコンをはじめとする冷暖房機器や換気システム、全館空調システムなどを使用する場合、吸排気の流れが床面に直接当たらないようにしてください。過度の乾燥がフローリング材の含水率に著しく影響し、材の収縮や割れの原因となります。そのため、風が無垢木材を使用した床、壁、天井面の一定箇所に継続的に当たらないようにしてください。フローリングを選定の際は、建築設計士や有識者の方にご相談ください。

2. フローリングの施工方法について

【商品の取り扱いについて】

<現場での保管方法>

直射日光や雨が当たる場所、湿度が高い場所での商品の保管は避けてください。また、保管する際は、反りや曲がり、エンド部分の木の損傷の原因となりますので、立て掛けず平置きにて保管してください。

<水濡れに注意>

著しい水分の吸収は木材の膨張の原因になります。水濡れの可能性がある環境への施工は控えてください。配管まわりや開口部の結露にもご注意ください。

<薬品に対する注意>

浸透性塗料塗装品の場合、金属やアルカリ性物質がフローリングに直接触れないように注意してください。フローリング材が変色する可能性があります。

【施工前の確認及び実施事項】

<商品の確認>

品質には万全を期しておりますが、万が一不良品や傷、色、木柄など不明な点がございましたら、必ず施工前にご相談ください。施工後のお取替えには応じられません。

<床暖房について>

床暖房対応フローリング以外の商品を床暖房に使用した場合、過度の隙間やひび割れが生じる恐れがあります。床暖房を使用する場合は、事前に床暖房対応商品であるかご確認ください。

<施工のタイミング>

壁、サッシの施工が終わり、風雨など外部からの影響を受けない状態になってから、フローリングの施工を行ってください。施工に際しては、下地の水濡れが無いことと、含水率が12%以下であることを、あらかじめ必ず確認してください。なお、現場によって手順が異なるケースもあるため、フローリングの施工に支障が出ない方法をご判断ください。

【施工に於いての禁止事項】

- 釘打ちの際フィニッシュネイルの使用は厳禁です(寄木張りを除く)。
- エンドマッチ部分に釘打ちをしないでください(一部の商品を除く)。
- 木工用ボンド(酢酸ビニルエマルジョン系)は使用しないでください。
- 接着剤は実部分に入らないようにしてください。
- 下地に12mm厚以上の1類、または特類の構造用合板を使用してください。MDF合板を下地に使用しないでください。
- 壁際のクリアランスは必ず5mm以上確保してください。
- フローリングに直接養生テープを貼らないでください。
- フローリングは、水拭き厳禁です。拭き掃除が必要な場合は、Arbor水性クリーナーワックスをご使用ください。
- RC工法の場合、コンクリートスラブやモルタルの含水率が4%以上の場合はフローリングの施工をしないでください。
- 接着剤は、フローリングの裏面に塗布してください。床下地への塗布は禁止です。

- 遮音マットの上への直張りはしないでください。
- 二重床への施工の場合、パーティクルボードへのフローリングの直張りは禁止です。必ず12mm以上の構造用合板を下張りした上で施工してください。

【推奨施工用具】

<接着剤の種類>

(1) 無垢フローリング、挽板フローリング、床暖房対応フローリング、寄木張りフローリング(カルブ貼りなし:釘打ちができる下地の場合)

1液型ウレタン樹脂系の木質床用(コニシ社製ボンドKU928C-X等)を推奨いたします。

※この接着剤は、木材の膨張収縮によるフローリングの動きに対応し、その動力を接着剤自体が吸収する“弾性”を有した接着剤です。水分との化学反応により硬化するタイプの接着剤のため、硬化後の体積収縮がなく、接着剤が原因の不快感な床鳴りを防止する効果があります。

※木工用ボンド(酢酸ビニルエマルジョン系)は厳禁です。水性のため床材の膨張による反りや割れ、床鳴りの原因となります。

(2) 寄木直張りフローリング(カルブ貼り:釘打ちができない下地の場合)

2液型エポキシ樹脂系(コニシ社製ボンドE350R等)を推奨いたします。

※この接着剤は、貼り付けた直後から接着力を発揮するため、釘を使用しない直張りフローリングの施工に適しています。

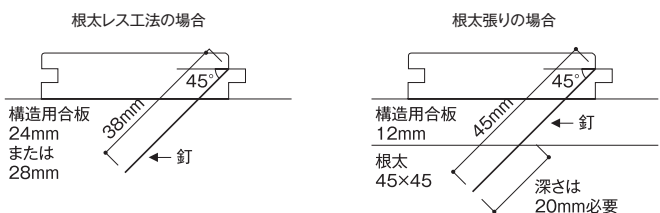
<釘の種類>

使用する釘(床材厚15mmの場合)は、根太レス工法の場合、フロアステーブル(マックスステーブル438MA)または38mmのスクリーネイルを推奨します。ステーブルやスクリーネイルの先端が合板を突き抜けないように施工してください。根太張りの場合は、フロアステーブル(マックスステーブル445MA)または45mmのスクリーネイルを推奨します。ステーブルやスクリーネイルは根太に届く長さのものを使用してください。

※下地やフローリング材の厚みによって、釘の長さの調整が必要になります。下表をご参照ください。

※若井産業社製のフロア釘を推奨いたします。

床材厚	釘の長さ	
	根太レス工法の場合	根太張りの場合
18・20mm	38mm	50mm
30mm	50mm	65mm



※フロアステーブルの場合、基本的にフローリング材に下穴をあける必要がなく空気圧の調整により施工を行えます。また、スクリーネイルの場合、下穴が必要になりますが、スクリーネイルの形状により、高い保持力を得ることができます。釘打ちの間隔は303mm以下としてください。

※フィニッシュネイルの使用は厳禁です。

【施工のポイント及び手順】

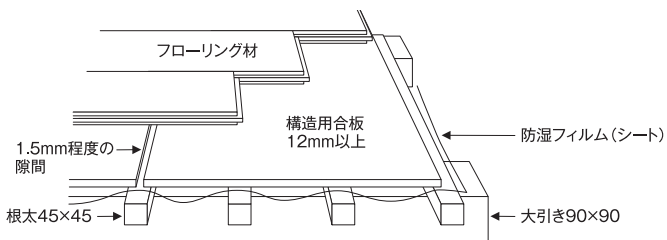
床暖房を入れる場合と直張りをする場合、寄木張りフローリングを張る場合については、通常の施工のポイント以外にも注意すべき事項や異なる点がございます。該当する場合には【床暖房を入れる場合の注意点(P.4)】【直張りをする場合の注意点(P.5)】【寄木張りフローリングの張り方(P.5)】も含めご確認ください。

<下地の確認及び湿気対策>

下地は必ず乾燥した材を使用し、下張り材の段差が1mm以下であることをご確認ください。段差が床鳴りの原因になる可能性がありますのでご注意ください。なお、スギの荒床下地を使用する場合は、あらかじめ含水率が12%以下であることを確認の上、根太に対して斜め45°に張り込んでください。

(1) 根太張りの場合

- 厚さ12mm以上の構造用合板の下張りが必要です。根太と合板の間に0.1mm以上のポリエチレン防湿フィルム(シート)を敷き込んでください。
- 下地合板の張り込みは1.5mm程度の間隙を空けて張り込んでください(下地合板の膨張による床面の突き上げを避けるため)。



(2) 二重床の場合

- フローリングを施工する場合は、ベースパネル(パーティクルボード)に直交するように12mm以上の構造用合板を必ず下張りしてください。合板の上から釘打ちの際、ベースパネルの目地に釘打ちすると床鳴りの原因になりますので、目地は避けて打つようにしてください。
- RC構造の場合は、必ず0.1mm以上のポリエチレン防湿フィルム(シート)を敷き込み防湿対策を施してください。コンクリートスラブからの湿気がフローリングの膨張の原因となります。

(3) 根太フォーム及びスタイロフォーム下地の場合

厚さ12mm以上の構造用合板の下張りが必要です。根太フォーム及びスタイロフォームへの直張りは禁止です。

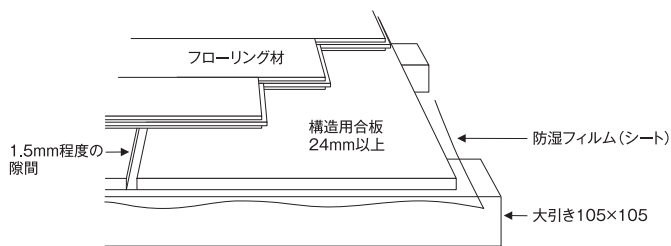
(4) 遮音マット及び石膏ボードを使用する場合

遮音マットの使用により、床鳴りを引き起こす可能性があります。特に、遮音マットへの無垢フローリングの直張りは禁止です。遮音マット及び石膏ボードを使用する場合は、遮音マット及び石膏ボードの上に12mm以上の構造用合板を下張りし、接着剤とスクリーネイルを併用し施工するなど、床鳴りの軽減のための措置を講じてください。

*構造用合板は、1類、または特類のものを使用してください。

(5) 根太レス工法の場合

- 根太レス工法の場合の大引きは、105mm角以上のプレナー掛けされた乾燥材を使用し、大引きの間隔は1000mm又は910mm以内としてください。
- 大引きと合板の間に0.1mm以上のポリエチレン防湿フィルム(シート)を敷き込んでください。
- 下地には、24mm以上の構造用合板を使用し、構造用合板とフローリングが直交するように張り込んでください。その際、必ず構造用合板が含水率12%以下に乾燥していることを確認してから施工してください。
- 構造用合板の水濡れは厳禁です。水濡れした場合は、含水率が12%以下になるまで施工しないでください。下地の含水率が高いまま施工するとフローリング材にカビ・突き上げ・隙間などが発生する原因となります。
- 下地合板の張り込みは1.5mm程度の隙間を空けて張り込んでください(下地合板の膨張による床面の突き上げを避けるため)。



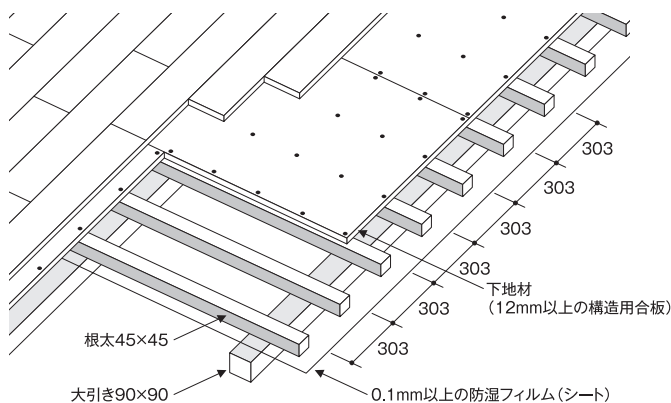
<フローリングの張り込み>

(1) 仮並べ

天然木は色調や木目が単一でないため、仮並べを行ってください。他の部分と際立って調和しないピースを目立たない場所に配置するなどの配慮は、仕上がりのイメージを向上させます。また、事前の仮並べは、端材の有効活用にもつながります。

(2) 張り込み

- フローリングの施工には、接着剤とフローステープルまたはスクリーネイルの併用が基本です。
- フローリングは構造用合板と根太に直交するように張り込んでください(構造用合板以外の無垢木材<スギの荒床など>の下地を使用する場合は、下地自体が膨張収縮する可能性が高いため、フローリングと下地を同じ方向に張るとフローリング材に不具合が生じる可能性があります。この場合に限り、下地材の張り込みは、根太に対して斜め45°に行ってください)。

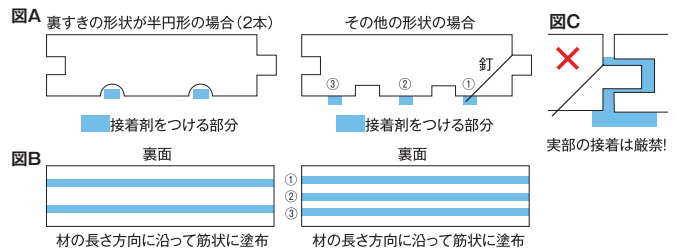


(3) 接着剤の塗布

裏すきの形状が半円形の場合は、その溝に沿って、裏すきが2本であれば2箇所、3本であれば3箇所に接着剤を直径6mm程度のひも状にして塗布してください。その他の形状の場合には、①釘の通過面、②材の中心、③雌実下やや内側の3箇所に筋状に塗布してください(図A・B参照)。接着剤の使用目安は、コニシ社製ボンドKU928C-Xの場合、1.65㎡当たり750mlです。

注) 実部分への接着剤の塗布は、床面全体が動き、局所的に大きな隙間を引き起こすため厳禁です(図C参照)。

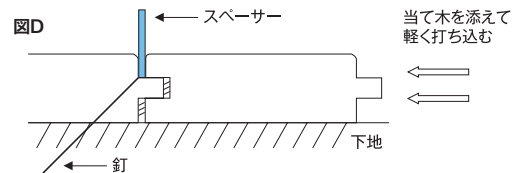
注) 接着剤は床下地ではなく、フローリングの裏面に塗布してください。*スギ、ヒノキなどの針葉樹は、床鳴りが発生し易い樹種です。フローリング材裏面の隅までしっかりと接着剤をつけることで床鳴りを軽減できます。但し、実部分に接着剤が入り込まないように、注意が必要です(図C参照)。



(4) 釘の打ち込み

雄実の付け根から材の中央方向へ向かって斜め45°に打ち込んでください。下地を通して根太に打つのが基本です。樹種ごとに材の堅さが異なりますので、フローステープルを使用する際は、エア圧の調整を行ってから施工してください。また、スクリーネイルを使用する場合は、必ず下穴をあけてください。その際、スクリーネイルのヘッド部分がはまるための穴(皿もみ)を、あけてください。

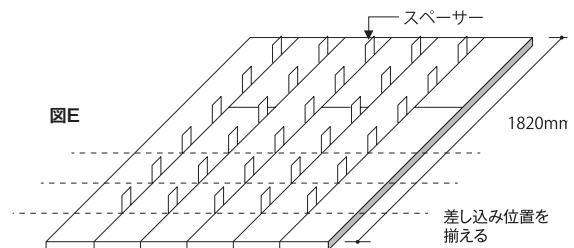
*エンドマッチ部分への釘打ちはしないでください。



(5) 実の差し込み

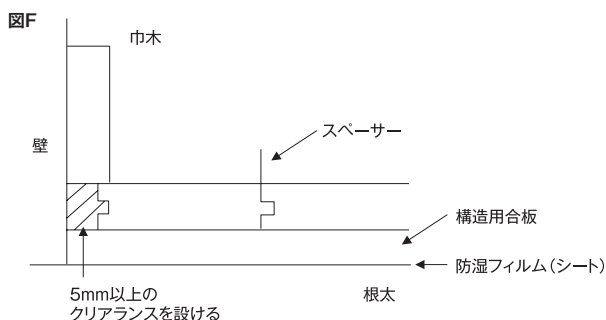
*挽板フローリング及び寄木張りフローリングは、スペーサーの使用は不要です。*無垢木材の特性である膨張収縮の観点から、基本的には通年でスペーサーを利用した施工を行ってください。

商品付属のスペーサーを使用してください。300~450mm間隔でスペーサーを入れた後、当て木の上からフローリング材を軽く叩いて実を差し込んでください(図D・E参照)。実の損傷やスペーサーの抜き取りが困難になる恐れがありますので、強く叩き込まないようにします。なお、エンドマッチ部のスペーサーは不要です。スペーサーはすぐに抜き取らず、接着剤の乾燥後(約12時間後)に抜き取ってください。



(6) 壁・敷居・框などへのフローリングの納め方

- 壁面には密着させず、巾木で隠れる寸法内で5mm以上のクリアランスを設けてください(図F参照)。フローリング材の膨張による壁や柱への押し込みやきしみを防ぎます。
- 敷居や框等と平行に接する部分にもスペーサーを用い、0.5mm程度のクリアランスを必ず設けてください。両端が敷居などの場合は、それ以上の十分な逃げの確保が必要です。
- 掃き出しサッシまたは浴室サッシとの接合部は、結露などによる水濡れの可能性が高いため、木端・木口にタッチアップ用の塗料を塗り、しっかりと防水処理をしてください。



(7) その他

- 最後の一行は、1週間程度期間をおいてからの施工が理想的です。施工後のフローリング材の微妙な動きを調整できます。
- 空調設備について
エアコンをはじめとする冷暖房機器や換気システムなどの、吸排気の流れが床面に直接当たる場合、過度の乾燥がフローリング材の含水率に著しく影響し、材の収縮や割れの原因となります。そのため、風が直接床面に当たらないようにしてください。

【床暖房を入れる場合の注意点】

例) 小根太付き温水マットへの施工の場合

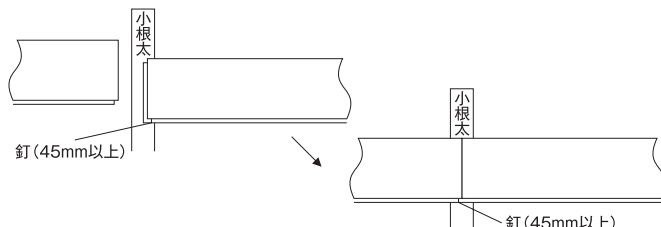
注) 床暖房対応フローリングを必ずご使用ください。

<下地の確認>

- 303mmのピッチで釘を打てない床暖房システムには使用できません。
- 床下地は小根太付き温水マットの下に、床として十分な強度を持つように12mm以上の構造用合板を使用し、段差が出ないように仕上げててください。
- 温水マット周辺部のダミー合板は、温水マットと同厚である12mm構造用合板を使用し、段差が無いように仕上げててください。
- 施工下地(温水マット、ダミー合板)は、掃除機などを用いて清掃してください。特に温水マット表面のゴミや油などは十分に取り除いてください。

<フローリングの張り込み>

- 温水マットの小根太とフローリングが直交するように並べてください。
- 下図を参考に温水マットの小根太の中央にフローリングの木口(短辺部)の接続箇所が乗るように割り付けてください。
- 温水マットとダミー合板の境目には、フローリングのつなぎ目が重ならないように割り付けてください。



<接着剤の塗布>

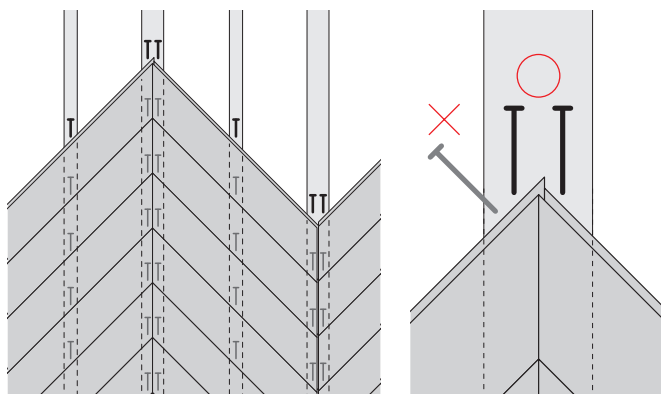
接着剤は、小根太の上面及び小根太の延長上の小根太のないマット部分に塗布してください。またダミー合板部分については200~300mmピッチで塗布してください(フローリング裏面、温水マット全面には塗布しないでください)。

注) 接着剤は点付けでなく、小根太の幅より広くフローリングの両端に接着剤が付くようにしてください。

<釘の打ち込み>

- 温水マットの小根太部分の全てに、必ず釘打ちをしてください。なお、小根太以外には釘を打たないでください。
- 釘打ちは、温水マットの小根太と重なる部分及びダミー合板部分にのみ行ってください。
- 部屋の端部(ダミー合板部分)でスクリーネイルを打てない箇所は、針釘(隠し釘)で固定し、フローリング材とダミー合板とが接着剤でしっかり固定された後(約2日後)、針釘(隠し釘)を抜いてください。
- 床暖房を使用する状況下で「ヨーロピアンオーク 挽板フレンチヘリンボーンフローリング」を施行する際は、下図のように、必ず小根太の長手方向に沿って釘を打ち込んでください。フレンチヘリンボーンフローリングの短手方向に沿って釘打ちを行うと、釘の先端が小根太の外側にはみ出し、床暖房システムを傷つけてしまう恐れがあります。この場合の釘は、スクリーネイルをご使用ください(フィニッシュネイル、フロアーステープルは禁止です)。

※上記の施工方法は一例です。それぞれの床暖房メーカーの施工要領に従って施工してください。



*構造用合板は、1類、または特類のものを使用してください。

【直張りをする場合の注意点】

注) 直張り対応フローリング(カルブ貼り)を必ずご使用ください。

<下地の確認>

モルタルの含水率が4%以下に乾燥しているかを必ず確認をしてください。乾燥が不十分な場合は、接着不良や材の反りの原因となりますので、施工をしないでください。

<不陸調整>

不陸調整を必ず行ってください。下地に合板を使用する場合は、不陸が無いよう合板とモルタルを接着剤(コニシ社製E350R推奨)で櫛目状に全面塗布し、コンクリート釘を併用して、しっかりと固定してください。合板は12mm以上の構造用合板を使用してください。

【寄木張りフローリングの張り方】

<注意事項>

- 張り込みの基準となる線を引く「墨出し」は確実に行ってください。
- 接着剤と釘を併用してください(スペーサーは不要です)。
- 釘打ちの際、ステーブルは使用しないでください。フローリングの締め過ぎと墨出し位置からのズレが生じる原因となります。
- 使用する釘はフィニッシュネイルを推奨します。フィニッシュネイルには強力な保持力はないため、釘打ち後の微調整や釘打ちによるズレなどが発生しにくいので仮止めに適しています。
- 釘打ちの際、ピンネイルは使用しないでください。ピンネイルには保持力がほとんどないため、施工直後の床のズレの原因となります。
- 接着剤はフローリングの裏面に塗布してください。
- 挽板フレンチヘリンボーンを床暖房システム(小根太付き温水マット)に施工される場合、接着剤は小根太の上面及び小根太の延長線上の小根太のないマット部分に塗布してください(フローリング裏面、温水マット全面には塗布しないでください)。

<無垢ヘリンボーン/フレンチヘリンボーンの張り方>

- (1) 空間に対して、どの向きで張るか決めてください。
- (2) フローリングの割付に基づいて張り込みの基準点を決め、基準点を中心に直交する2本の線(A線・B線)を引き、さらにそれらの線から45度の角度でC線とD線を引いてください(この際、基準点上のA線に沿って山なりに施工されると理解してください)。
- (3) 基準線となるA・B・C・D線に対して、フローリングの長さに合わせてピッチで平行な線を複数引いてください(A・B・C・D各線のピッチについては、下記を参照)。

ヘリンボーンの場合:

A・B線は、212mm(フローリングの長さ300mmの場合)、322.5mm(フローリングの長さ456mmの場合)、346.5mm(フローリングの長さ490mmの場合)、593.5mm(フローリングの長さ840mmの場合)のいずれかのピッチ。C・D線は、フローリングの長さ(300mm、456mm、490mm、840mmのいずれか)のピッチ。

フレンチヘリンボーンの場合:

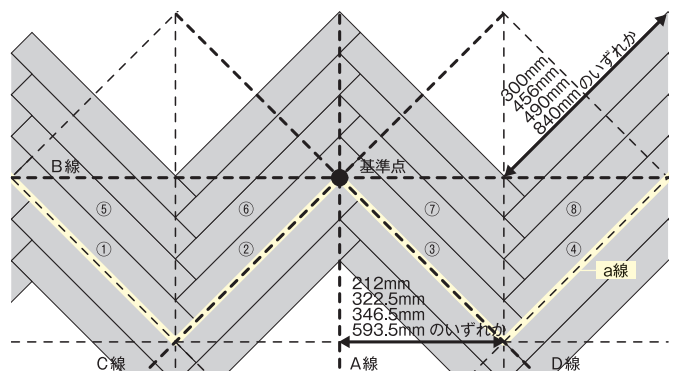
A・B線は、382mm(フローリングの長さ540mmの場合)のピッチ。C・D線は、フローリングの長さ(540mm)のピッチ。

(4) 図のように①・②・③の順番で張りはじめ、基準線を目安に施工してください。無垢木材は、含水率の変化にともない膨張収縮するため、張り込みの際、基準線に対して多少のズレが生じる場合があります。基準線はあくまでも目安として施工を行ってください。

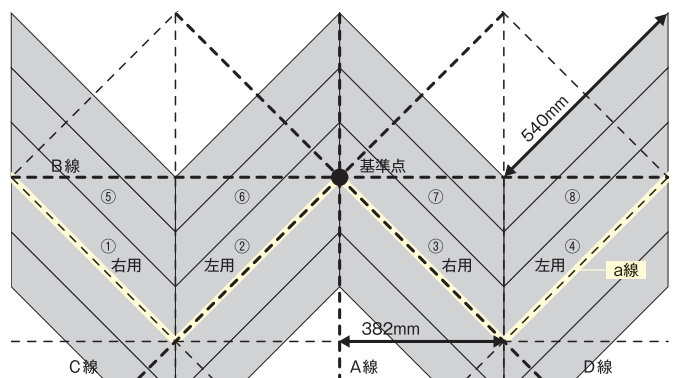
- 接着剤と釘を併用してください(スペーサーは不要です)。

- 下図のように、上下2方向に張り進めていく場合には、双方の張り始めのピースの接合部(図a線)は、雌実同士の突き付けとなるため、「ヤトイ実」(4mm×8mm)をご用意ください。

ヘリンボーンの場合



フレンチヘリンボーンの場合



フレンチヘリンボーンは片木口雌実、反対側の木口雌実で右用と左用があります。右用と左用を交互に張り並べて施工してください。

<挽板フレンチヘリンボーンの張り方>

- (1) 空間に対して、どの向きで張るか決めてください。
- (2) フローリングの割付に基づいて張り込みの基準点を決め、基準線となるA線を引き、基準点上でA線と垂直に交差するB線を引いてください。
- (3) A線に対して、並行な線を606mmピッチで複数引いてください(床暖房に使用される場合、小根太付き温水マットに組込まれている小根太の中心線とA線を一致させてください)。B線に対して、並行な線を350mmピッチで複数引いてください。
- (4) 基準点上でA線と60°の角度で交わるC線とD線を引いてください(C線とD線は図のようにA線とB線によって構成された長方形グリッドの対角線と一致することになります)。

(5) 基準線となるC・D線に対して並行で長方形グリッドの対角線と重なる線を複数引いてください。1辺が700mmの菱形が複数描かれる事になり、この1辺とフローリングの長辺700mmは5枚おきに重なることになります。

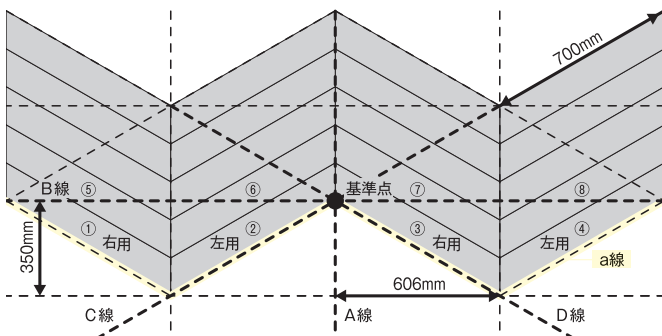
(6) 図のように①・②・③の順番で張りはじめ、基準線を目安に施工してください。

含水率の変化にともない微妙に膨張収縮するため、張り込みの際、基準線に対して多少のズレが生じる場合があります。基準線はあくまでも美しく張り上げるための目安として施工を行ってください。

● 挽板フレンチヘリンボーンフローリングを床暖房システム(小根太付き温水マット)に施工される場合には、P4【床暖房を入れる場合の注意点】を必ずご確認ください。

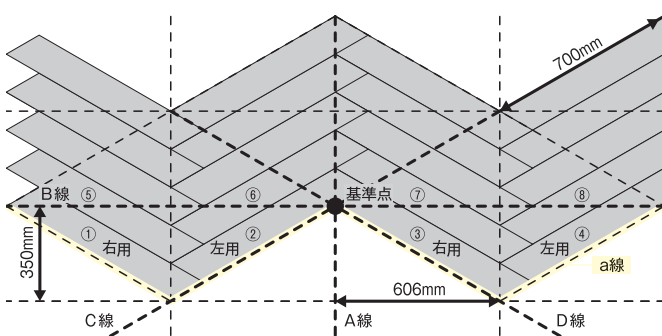
● 下図のように、上下または左右の2方向に張り進めていく場合には、双方の張り始めのピースの接合部(図a線)は、雌実同士の突き付けとなるため、「ヤトイ実」(4.5×10mm)をご用意ください。

FEKE76-122 + FEKE77-122の場合



片木口雄実、反対側の木口雌実で右用(FEKE76-122)と左用(FEKE77-122)があります。右用(FEKE76-122)と左用(FEKE77-122)を交互に張り並べて施工してください。

FEKE78-122 + FEKE79-122の場合



三方雌実で右用(FEKE78-122)、片木口雄実、反対側の木口雌実で左用(FEKE79-122)があります。右用(FEKE78-122)の左側木口には、付属のヤトイ実を長さ137mmにカットして組み入れ、右用(FEKE78-122)と左用(FEKE79-122)を交互に張り並べて施工してください。

<バスケットチェック張り®の張り方>

(1) 空間に対して、どの向きで張るか決めてください。

(2) フローリングの割付に基づいて張り込みの基準点を決め、基準点を中心に挟んだ85.5mm間隔にA線・B線を引いてください。さらに基準点を中心に挟み85.5mm間隔でA線・B線と垂直に交差するC線・D線を引いてください。

(3) B線に対して285mm間隔で並行なE線を引いてください。D線に対して285mm間隔で並行なF線を引いてください。図のようにそれぞれの基準線に対して交互に平行な基準線を85.5mmと285mmの間隔で複数引いて、張り込む範囲全面に「墨出し」を行ってください。

(4) 図のように①・②・③の順番で張りはじめ、基準線を目安に施工してください。無垢木材は、含水率の変化にともない膨張収縮するため、張り込みの際、基準線に対して多少のズレが生じる場合があります。基準線はあくまでも美しく張り上げるための目安として施工を行ってください。

● フローリング57mm×456mmを5枚ずつ並べて張りこむ際に、①は接着剤とフィニッシュネイルで固定し、②③④は釘打ちせず接着剤のみで張り込んでください。

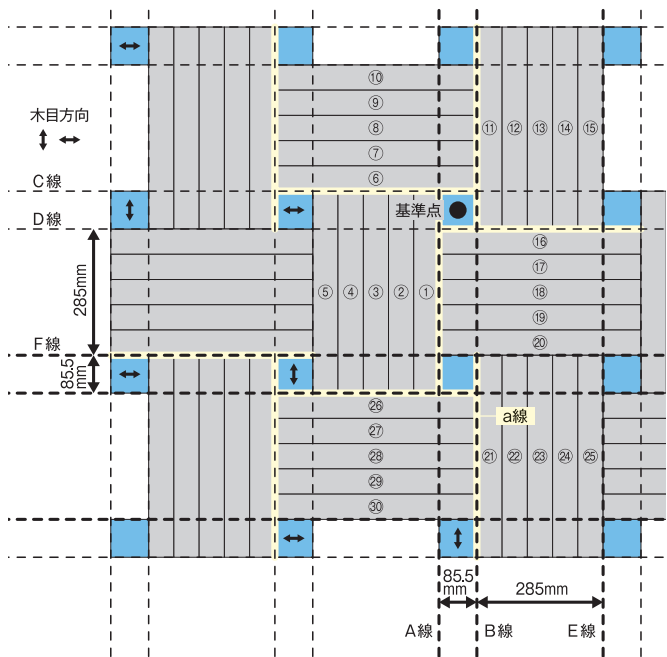
● フローリングの寸法誤差の調整は③にて調整してください。

● ⑤は接着剤とフィニッシュネイルで固定してください。

● 85.5mm角の正方形ピースは接着剤のみで施工してください。また正方形ピースを並べる際の木目の方向は、必ず設計者・お施主様の意向を確認した上で施工して下さい。

● 雌実同士が突き付けになる部分(a線)には、AIN-SQ-01-121とセットになっている「ヤトイ実」(4.8mm×9mm×443mm)を使用してください。

バスケットチェック張り®の場合



※サテン張りのパターンは担当者までお問い合わせください。

*構造用合板は、1類、または特類のものを使用してください。

3.フローリングの養生について

<表面クリーニング>

養生の前には施工面をきれいに掃除し、細かな塵やほこり、粉などの汚れが無い状態にしてください。床材の表面に細かな傷ができるのを防ぎます。ボードの粉の付着、日焼け、毛羽立ち、養生テープの跡など問題が生じる可能性がありますので、下の<養生の方法>に従ってしっかりと行ってください。

<表面保護>

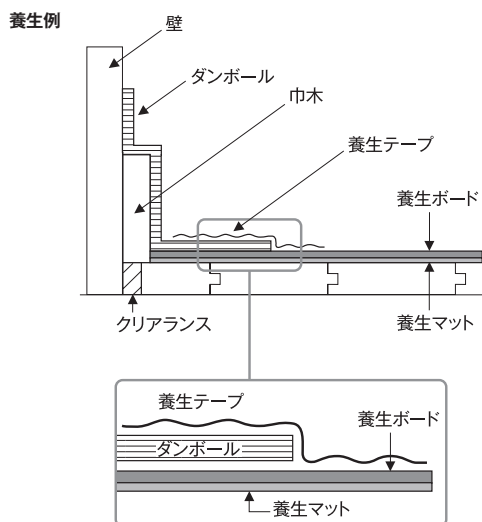
張り上げ後は、表面保護のため養生マットの上に養生ボードを重ね張りし、施工面全面を覆い隠してください。露出している箇所があった場合、日焼けによる変色の原因となりますので十分ご注意ください。

<養生テープの使用方法>

塗装の種類に関わらず、養生テープをフローリングに直接貼らないでください。特に、オイルやワックスなど浸透性塗料塗装品の場合、養生テープの粘着剤によって塗装はがれたり、粘着剤が付着し汚れや変色の原因となります。

<養生の方法>

注)養生マット及び養生ボードの再利用はしないでください。
養生は床の上に養生マットを敷き詰め、その上に養生ボードを設置してください。下図を参考に養生テープがフローリングに直接触れないようにしてください。養生テープをやむを得ず貼る場合は、粘着力の弱いものを使用し、できるだけ短期間ではがしてください。また、はがす際には、勢いをつけず、ゆっくりとはがしてください。なお、浸透性塗料で仕上げたフローリングについては、必ず跡が付きまますので、その箇所をサンディングして、再塗装を施してください。



4.お引渡し前の クリーニング方法について

<クリーニング方法>

塗装の種類によって、クリーニング方法が異なります。必ず施された塗装をご確認の上、行ってください。

	浸透性塗料塗装品	コーティング系塗料塗装品	高機能塗料塗装品
塗装の種類	<ul style="list-style-type: none"> ● Arbor植物オイル ● Arbor蜜蝋樹脂ワックス ● Arbor針葉樹白木用オイルワックス ● Arborドライワックス ● ベーシックオイル 	● ウレタン塗装	<ul style="list-style-type: none"> ● Arborナチュラルプラス ● Arborインビジブルコート ● Arborガラスフィニッシュ
水拭き	水拭き厳禁	水拭き可(固く絞った雑巾)	
汚れ落とし	Arbor水性クリーナーワックスを使用(着色の浸透性塗料には不可)	Arbor水性クリーナーワックスを使用	
最終仕上げ	基本的には、塵や汚れを完全に取り除いた後、同一のオイルまたはワックスの上塗りが理想です。なお、ベーシックオイル塗装品の場合は、Arbor植物オイルをご利用ください。	Arbor水性クリーナーワックスにて汚れが除去できれば完了です。市販のツヤ出しワックスを塗りますと、塗装の風合いが変わってしまいますので、お勧めできません。 ※高機能塗料塗装品には市販のワックスは使用しないでください。	

<ワックスの使用についての注意事項>

- 市販の水性ワックスを使ったモップ掛けは、木材が膨張するなど大きなトラブルの原因になります。汚れ落としには、弊社推奨のArbor水性クリーナーワックスを水で10倍に希釈し、きれいな雑巾に浸して固く絞って拭き掃除をしてください。
- ワックスは、直接フローリングにたらさないでください。フローリングの隙間に入り込み、木材の膨張や変色の原因になります。
- 浸透性塗料塗装品及び高機能塗料塗装品の場合、市販の水性ワックスまたは樹脂系油脂ワックスは使用しないでください。フローリング材の膨張、毛羽立ち、塗装はがれ、白濁の原因となります。

5. お引渡し後の注意事項について

- ホットカーベットの使用は厳禁です。フローリングの収縮や割れの原因となります。
- 床暖房を施したフローリングの上には、カーベットの付いていない家具など、放熱の妨げとなるものを置かないでください。熱がこもり異常な高温になることで、フローリング材に不具合が生じる恐れがあります。
- 空調設備の送風がフローリングに直接当たらないようにしてください。隙間や割れの原因となります。
- 水拭きは避けてください。特にタンニンの多い樹種は、水拭きにより木材内部のタンニンが溶脱し、変色を起こすことがあります。
- カーペット、マット、ラグをご使用になる場合は、裏面が天然繊維のものをお選びください。

6. パネリングの施工方法について (内装用壁・天井材・外壁・準不燃)

【商品の取り扱いについて】

<現場での保管方法>

直射日光や雨が当たる場所、湿度が高い場所での商品の保管は避けてください。また、保管する際は、反りや曲がりの原因となりますので、立て掛けないでください。

<水濡れに注意>

著しい水分の吸収は木材の膨張の原因になります。水濡れの可能性がある場所や、湿気の多い場所への施工は控えてください。配管まわりや開口部の結露にもご注意ください。

<持ち運び方法>

商品に触れる際は手袋を着用し、パネリングに素手で直接触れないようにしてください。

【施工前の確認及び実施事項】

<商品の確認>

品質には万全を期しておりますが、万が一不良品や傷、色、木柄など不明な点がございましたら、必ず施工前にご相談ください。施工後のお取替えには応じられません。

<施工のタイミング>

パネリング施工の前に、風雨など外部からの影響を受けない状態になってからパネリングの施工を行ってください。建築中の雨漏りには特に注意が必要です。

<壁・天井と接する場合>

パネリングが塗り壁と接する場合、塗り壁に使用されるアルカリ性の塗剤、もしくは水分と反応し、塗り壁が黒色に変色する恐れがあります。クロスの場合でも、パネリングの樹脂等により、クロスが変色する可能性があります。該当箇所には見切り材を使用してください。やむを得ず、見切り材を使用せずに施工する際は、パネリングの壁・天井に接する箇所にシーラー剤を塗布する必要があります。

【推奨施工用具】

<接着剤の種類>

1液型ウレタン樹脂系の木質床用(コニシ社製ボンドKU928C-X等)をご利用ください。

※この接着剤は、木材の膨張収縮によるパネリングの動きに対応し、その動く力を接着剤自体が吸収する“弾性”を有した接着剤です。

※木工用ボンド(酢酸ビニルエマルジョン系)は厳禁です。水性のためパネリングの膨張による反りや割れなどの原因となります。

【施工のポイント及び手順】

<下地の施工>

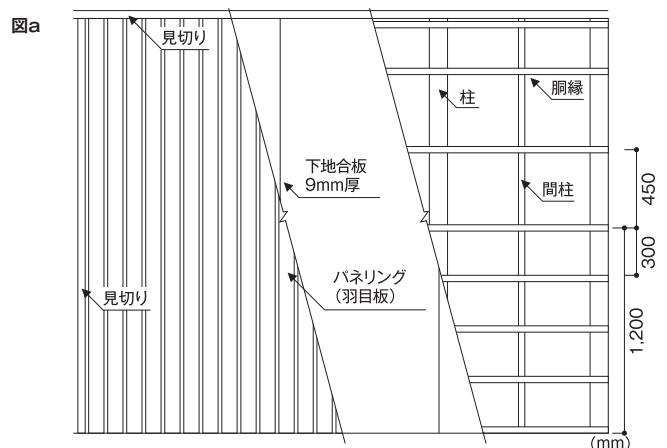
パネリングを天井部や斜壁面に取り付ける場合は、下地にあたる桧木を釘止めし、落下しないよう、各部をしっかりと連結してください。また施工後、壁面にカーテンレール・フック等を取り付ける場合は、下地がある場所を確認の上、取り付けたものが落下しないようにしてください。

(1) 木質ボード(合板)下地の場合(図a参照)

- 木質ボード(9mm以上)にはビス保持力が十分にあるものを使用してください。

(2) 石膏ボード下地の場合(図a参照)

- 石膏ボード上に施工する場合は、石膏ボードの下に必ず胴縁・野縁などパネリングを確実に固定できる下地が必要です。製品の継ぎ目が胴縁・野縁の上にくるように割り付けてください。横張りの場合は、下地合板の上に施工してください。
- 石膏ボードの継ぎ目と製品の継ぎ目は重ならないようにしてください。
- 乱尺パネルの場合は石膏ボードに9mm以上の合板を使用し、施工してください。



<パネリングの張り込み>

(1) 仮並べ

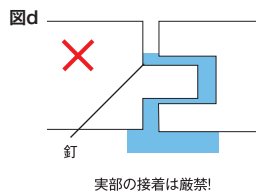
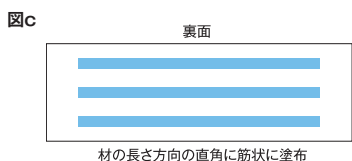
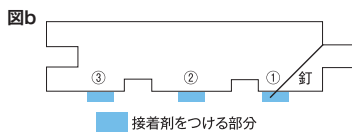
- 天然木は色調や木目が単一でないため、仮並べを行ってください。全体で見るときに色柄のバランスが良くなるよう配置してください。他の部分と際立って調和しないピースを目立たない場所に配置するなどの配慮は、仕上がりのイメージを向上させます。
- 部屋の形状及び張り方向のデザインに応じて隅の納まりを考慮し、極端な小巾材が出ないように割り付けを行ってください。
- 木口部分をつなく際、微妙な巾違いが見られるケースがあります。仮並べをして木口部分の巾合わせを行ってください。

(2) 張り込み

- パネリングの施工には、必ず接着剤と釘(ステーブルまたはスクリーネイル)を併用してください。
- パネリングの中方向の膨張を和らげるために、下記の方法をお勧めします。
 - ① ゆるめに張り込む。
 - ② パネリングの雄実部分に、緩衝材(ゴム状)を貼り付けクッション機能を持たせる。
 - ③ スペースを使い0.5mm程度の間隙を設ける(本実加工の商品)。

(3) 接着剤の塗布

- 接着剤は、下地のボードに塗布せず、パネリング一枚ずつに塗るようにしてください(一度に全ての板に塗ってからの施工は避けてください)。
- ①釘の通過面、②材の中心、③雌実下や内側の3箇所に筋状に塗布してください(図b・c参照)。接着剤の使用目安は、コニシ社製ボンドKU928C-Xの場合、1.65㎡当たり750mℓです。
注) 実部分への接着剤の塗布は厳禁です。一箇所に大きな隙間を引き起こす原因となるためご注意ください(図d参照)。
- 木工用ボンド(酢酸ビニルエマルジョン系)は厳禁です。



(4) 釘の打ち込み

- 釘(ステーブルまたはスクリーネイル)は、板厚の2.5~3倍の長さを目安に使用してください。
- 釘(ステーブルまたはスクリーネイル)は、材の中央方向へ向かって斜め45°に打ち込んでください。下地を通して胴縁・野縁に打ち込んでください(P3図D参照)。

(5) 周囲の納め方

- パネリングの中方向の両端は、柱や間柱などに密着させないで必ず5~10mm程度のクリアランスを設け、額縁や廻り縁などで隠してください。また、張り終える最後の一枚は、1週間程度期間をおいてからの施工が理想です。なお、腰壁上部を、珪藻土や漆喰など塗り壁にする場合は、湿気によるパネリングの反りや膨張が起こりやすいため、特に注意が必要です。

- 鴨居・窓枠・ドア枠などは、パネリングと密着させずに若干のクリアランスを設けて施工してください。
- パネリングの各板の張り込み、及び隣接する出入隅はきつくせず、若干のクリアランスを設けて施工してください。
- 換気扇・点検口・ダクト・ダウンライト等を取り付ける際は、取り付け部と下地の補強を十分に行ってください。

【外壁パネルの張り方】

- 建築基準法に基づき、施工できる場所を確認してください。
- 防水シートで水の侵入を防いでください。
- 外部木質パネルと防水シートの間に通気を目的とする厚み18mm以上の胴縁を入れてください。胴縁の間隔は455mm以下となるようにしてください。
- 固定は接着剤(コニシKU928C-X等)とステンレス製の釘で施工してください。
- 開口部の防水は下地にてしっかりと作り上げてください。

【準不燃パネルの張り方】

- 準不燃木材は弱酸性の特性を持ちますので、接する金物は全てステンレス製の耐酸性を持つものでの取り付けをお願いします(釘・ビス等含むすべて)。
- 取り付け場所、保管場所が外部、多湿な環境の場合、結露を起こし、湿気を帯びてしまいます。換気や空調設備等で多湿な環境とならないように注意が必要です。
- 外部、外気に触れる場所へは使用しないでください。雨水、空気中の水分の影響で防火成分が浮き出る白華現象が生じ、性能の低下につながります。製造工程上、多量の防火成分を注入するため、内部でも白華現象が生ずる場合もあります。
- 準不燃材は接着剤が付きにくいので、接着剤のみの取り付けは避けてください。
- 水性塗料、ラッカー系塗料の使用により、白濁、剥離等の不具合が生ずることがあります。塗装をする際には必ず事前にご相談ください(湿度管理が難しい現場塗装ではなく、工場での塗装をお勧めします)。

※PBC05-122の張り方に関しては担当者までお問い合わせください。

7. 階段施工に関する注意点

- 建築基準法などの法令規則に従って施工してください。
- 鉄骨下地階段の踊り場部分や2段廻り部分に関しては、段板を固定する鉄骨部分のビス穴を楕円形にするなど、無垢木材の動きを吸収できるよう、あそびを設けてください。
- 廻り階段や踊り場部分には、受け下地材を入れて補強してください。
- 踊り場部分に関しては、工法や階段の仕様によって、推奨する部材(ヤトイ実加工・ヤトイ実寸止め加工・巾ハギ加工)が異なります。
- 本部材の施工場所は、住宅の屋内に限ります。下地の工法や材料仕様などには住宅(建築構造)との兼ね合いがありますので、必ず現場監督・建築士など、有資格者と相談の上施工してください。

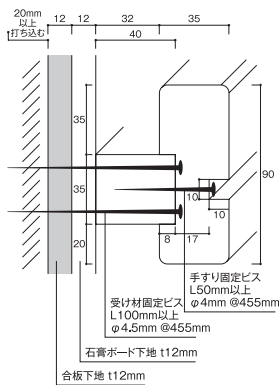
8.階段手すりの施工方法について

(1) 受け材を固定(柱、間柱ピッチ455mmの場合)

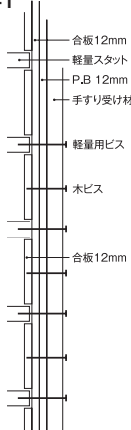
- ビスは長さ100mm以上、径4.5mm以上のもを使用してください。
- 受け材厚40mm+石膏ボード下地12mm+合板下地12mm
間柱及び柱には、ビスを20mm以上打ち込んでください(LGS(軽量鉄骨)工法の場合は、スタットに軽量用ビスを打ち込んだ上で、スタット間についても12mm合板を二重張りし、木ビスを打ち込んで固定してください)。(図i-1、2、3参照)
- 下地の間柱及び柱までの距離を加味してビスの長さを選択してください。ビスは工法に合ったものを選択してください。
- ビス止めのピッチは間柱及び柱の間隔455mmに打ち込んでください(LGSの場合、スタット間にもビスを打ち込むため、ビス止めのピッチは150mmとなります)。(図ii-1、2、3参照)但しスタート・エンドからの1本目は、100mm以内に打ち込みを行ってください(スタート・エンドの100mm以内の場所に下地(柱・間柱・スタット)がない場合は、12mm合板を二重張りして下地を確保してください)。(図iii-1、2参照)
- 施工時は、必ず下穴をあけてからビスを打ち込んでください。ビスは1カ所につき2本打ち込み、固定してください(径4.5mmのビスを使用する場合は、受け材と壁下地の間に隙間が発生することを防ぐため、受け材のみに5.0mmまたは5.5mmの下穴をあけてください)。

手すり90の場合

図i-1

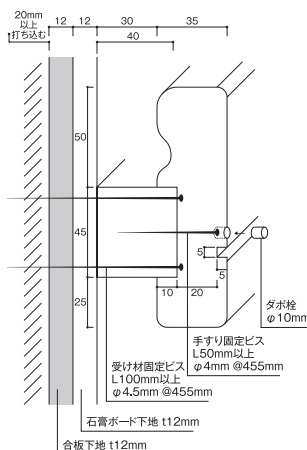


図ii-1

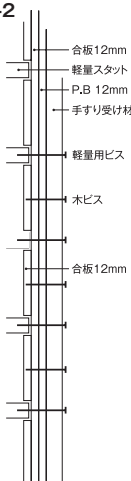


手すり120の場合

図i-2

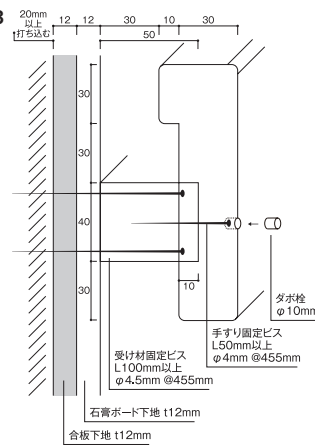


図ii-2

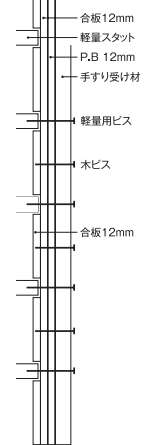


手すり130の場合

図i-3

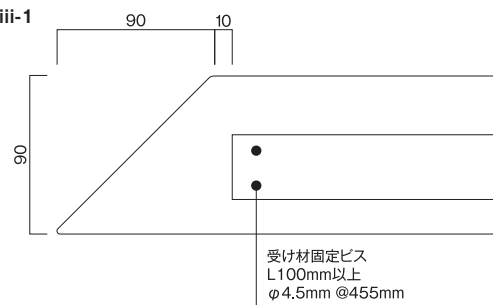


図ii-3



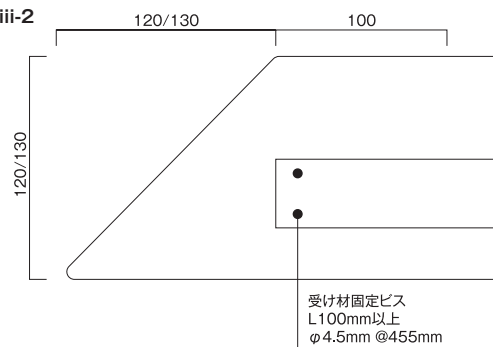
手すり90の場合

図iii-1



手すり120・130の場合

図iii-2



※手すり端部の角度及び長さは、階段の傾斜により異なるため、あらかじめご指示ください。

(2) 手すりを固定

- 受け材に手すりを固定する際は、接着剤とビスを併用してください。接着剤は、ウレタン樹脂製が望ましいですが、微発泡し、はみ出す場合がありますので注意してください。
- 手すりに深さ10mmのスリットを入れた場合、ビスは長さ50mm以上、径4mm以上のもを使用してください(手すり厚25mm+受け材厚40mm)。
- ビス止めのピッチは455mm以内で打ち込んでください。ただしスタート・エンドからの1本目は、100mm以内に打ち込みをしてください。
- 施工時は、必ず下穴をあけてからビスを打ち込んでください(径4mmのビスを使用する場合は、手すりと受け材に対して3.5mmの下穴をあけてください)。

9.こんなときどうする!? (お引渡し前)

(1) 施工後に市販のワックスをかけてもいいですか?

<浸透性塗装/高機能塗装>

市販のワックスは、白濁や毛羽立ちなど不具合の原因となることがありますので使用しないでください。

<コーティング系塗装>

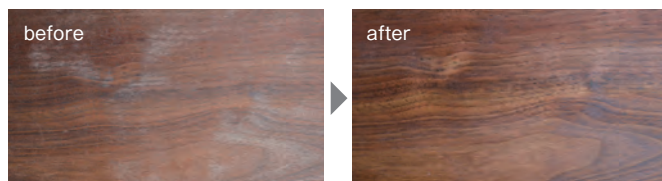
商品によっては、ツヤ感が変わることがありますので、目立たないところでお試しいただくか、Arbor水性クリーナーワックスをご使用ください。

(2) 引渡し前にもう一度仕上げと同一のオイルやワックスを塗ったほうがいいですか?

<浸透性塗装>

塗装済みの商品であれば、通常再塗装の必要はありませんが、ウォールナットなど、色の濃い樹種に関しては施工直後、素材の性質上、逆目部分が白濁して見えやすいため、再塗装していただくことをおすすめします。なお、再塗装の際は、塗りすぎに注意し、少量を擦り込むように塗り、十分に拭き取りを行ってください。塗装後も白濁が残る場合は、気になる部分を#240~320程度のサンドペーパーで木目に沿うように研磨し、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。なお、汚れが目立つ場合についてはP12の「(8) 表面の汚れを落としたい」をご参照ください。

注) Arbor植物オイルの商品の上に一度Arbor蜜蝋樹脂ワックスを塗ってしまうと、オイルが浸透しないため、その後Arbor植物オイルの塗装ができなくなります。一度、Arbor蜜蝋樹脂ワックスへ切り替えた場合は、Arbor蜜蝋樹脂ワックスを使つてのメンテナンスになりますのでご注意ください。



<コーティング系塗装/高機能塗装>

汚れが目立つ場合はArbor水性クリーナーワックスでのクリーニングをお勧めします。

(3) 養生テープの跡が残ってしまった。

<浸透性塗装>

養生テープの跡が発生した場合、その部分を#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。



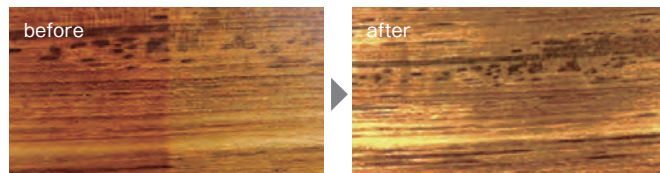
<コーティング系塗装/高機能塗装>

基本的に、粘着力の弱いテープを使用し、早い段階ではがしてください。万が一、跡が気になる場合は、無水エタノールを使って落とすことができます。

(4) サッシ際など、養生されていない部分が日焼けしてしまった。

<浸透性塗装>

日焼けによって色の差が生じてしまった場合、色の境目の部分を10~20cmの巾で#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装します。対処直後は、色の差が少し生じますが、数週間経つと色の差が自然になじんできます。完全になじむことは難しいので、防止するためにも養生の際に隙間を作らないことをお勧めします。サンディングの際、強く削るのではなく、軽くほかす程度に行くと自然な仕上がりになります。



<コーティング系塗装>

表面がコーティングされていますので、補修は難しいですが時間とともに色がなじんできます。

※上記、2種類とも完全になじませるのは難しいので、養生の際に隙間を作らないことをお勧めします。

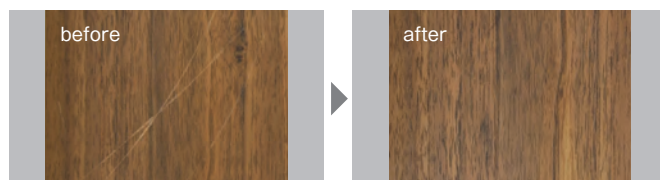
(5) 塗装後の床のべたつきがとれない。

塗装後の乾拭きが不十分か、塗布量が多すぎることが原因の「吹き戻し」の可能性があります。まずは、再度べたつきが無くなるまで乾拭きを行ってください。それでもべたつきが取れない場合は、無水エタノールを使用してください。

(6) すり傷ができた。

<浸透性塗装>

浅い傷の場合は、その部分を#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。深い傷ができた場合は、P12の「(11) 割れが生じてしまった」をご参照ください。



<コーティング系塗装/高機能塗装>

表面がコーティングされていますので、サンディング等による補修はできません。補修業者などによる、コーティング系塗料の再塗装(補修)をお勧めします。

(7) 凹み傷ができた。

<浸透性塗装>

凹んだところに濡れタオルを置き、その上からアイロンを当てると、ある程度は元に戻ります。特に、スギやパインなど柔らかい樹種は、より凹み傷が戻りやすく効果的です。目立たなくなってきたら、しっかりと乾燥させた後、その部分を#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。深い傷ができた場合は、P12の「(11) 割れが生じてしまった」をご参照ください。

*傷部分に先端の細い針で数箇所穴をあけてからアイロンを当てると、より効果があります。
*木がえぐれていたり、欠けてしまっている場合は補修を施しても戻らない可能性があります。
気になる場合はパテを使用して補修を行ってください。



凹み傷がついたフローリング (スギ)

傷の上に濡れタオルを置きアイロンを当てる。この作業を、凹み傷がある程度元に戻るまで、様子を見ながら数回繰り返します。

乾燥後にサンドペーパーをかけ再塗装を行うと、凹み傷がほとんど目立たなくなります。

(8) 表面の汚れを落としたい。

<浸透性塗装>

水拭きは厳禁です。乾拭きもしくは、Arbor水性クリーナーワックスで汚れを落としてください。それでも落とせない汚れの場合は、その部分を#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。なお、補修当初は再塗装された部分と、その周辺部分とは色やツヤなどに微妙な違いが生じることがありますが、経年変化によって次第になじんでいきます。

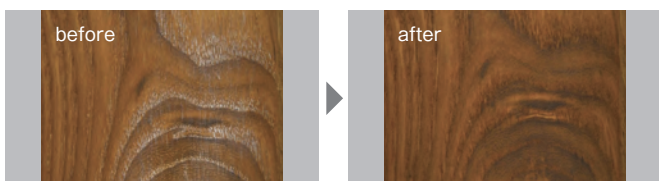
<コーティング系塗装/高機能塗装>

Arbor水性クリーナーワックスでの汚れ落としをお勧めします。

(9) 木目にプラスターボードの粉が入った。

(浸透性塗装の場合)

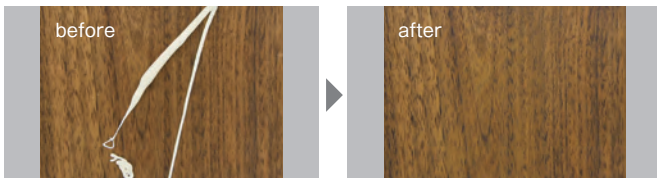
プラスターボードの粉が深く入り込んでいない場合は、エアーで簡単に吹き飛ばすことができます。エアーを使ってもダメな場合は、硬めの歯ブラシで粉やほこりを掻き出し、その後仕上げと同一の塗料で再塗装してください。それでも難しい場合は、粉やほこりをサンドペーパーで削り取り、仕上げと同一の塗料で再塗装をすることで補修できます。



(10) 表面に接着剤がついてしまった。

<浸透性塗装>

ウレタン樹脂系の接着剤が付着した場合は、スクレーパーなどで比較的簡単に除去できます。それでも除去できない場合は、サンドペーパーで周囲をぼかしながら削り取り、その後仕上げと同一の塗料で再塗装してください。



<コーティング系塗装/高機能塗装>

- 付着直後の場合: コニシ社製「ボンドふき太郎」(拭き取りシートタイプ)などをご使用ください。
- 付着から時間が経っている場合: コニシ社製「はがし液KUX」などで拭いてください。

注) コニシ社製以外の接着剤をご使用の場合は、各製造メーカーにご相談ください。

注) コーティング系塗料で仕上げた商品であっても、木目などに接着剤が残ることがありますので、拭き取りを行う際は、目立たない箇所を試してから行ってください。また、あまり強く拭くとツヤが変わる恐れがありますのでご注意ください。

注) シンナーでの拭き取りは、塗膜を傷める恐れがあるので使用しないでください。

(11) 割れが生じてしまった。(浸透性塗装の場合)

補修箇所の色に調整したファーモウッド・パテを隙間なく擦り込み、乾燥させた後、その部分を#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。

(12) 水拭きや湿気による毛羽立ちが起こってしまった。

(浸透性塗装の場合のみ)

浸透性塗料で仕上げた商品は、水拭き厳禁です。もし、毛羽立ちが起こってしまった場合には、ストッキングにウエスを詰め込んだもので擦ると取り除くことができます。ストッキングの微小な網目が毛羽立ちを取り除くことに適しています。また台所用のスポンジの硬い面やスチールワールでも同様の効果が期待できます。

(13) 水シミなどの白濁が起こってしまった。

(浸透性塗装の場合のみ)

白濁した部分をArbo水性クリーナーワックスや無水エタノールで拭き取ると取れる場合もあります。それでも取り除けなければ、その部分を#180程度のサンドペーパーで木目に沿って削り落とします。その後、#240~320程度のサンドペーパーで木地調整をし、仕上げと同一の塗料で再塗装してください。

10.メンテナンスについて

無垢木材のお手入れ方法は、表面に施されている塗装の種類(浸透性塗料とコーティング系塗料、高機能塗料)によって異なります。ご利用の商品の塗装をご確認の上、下記の案内を参考にしてください。

		浸透性塗料で仕上げたフローリング	コーティング系塗料で仕上げたフローリング	高機能塗料で仕上げたフローリング
塗装の種類		<ul style="list-style-type: none"> ● Arbor植物オイル ● Arbor蜜蝋樹脂ワックス ● Arbor針葉樹白木用オイルワックス ● Arborドライワックス ● ペーシックオイル 	<ul style="list-style-type: none"> ● ウレタン塗装 	<ul style="list-style-type: none"> ● Arborナチュラルプラス ● Arborガラスフィニッシュ ● Arborインビジブルコート
日常のお手入れ		1.表面の塵やほこりを掃除機などで除去 2.基本は乾拭き(水拭きは避ける) ● 汚れを落としたい場合 軽微な汚れ: Arbor水性クリーナーワックスを使用 頑固な汚れ:サンディング・再塗装	1.表面の塵やほこりを掃除機や化学雑巾などで除去 2.固く絞った雑巾で水拭き ● 汚れを落としたい場合は、Arbor水性クリーナーワックスを使用	1.表面の塵やほこりを掃除機などで除去 2.乾いた雑巾または固く絞った雑巾で水拭き(水気が残っている場合は乾拭き) ● 汚れを落としたい場合 軽微な汚れ: Arbor水性クリーナーワックスを使用 頑固な汚れ: サンディング・Arbor マルチケアまたは Arbor ガラスフィニッシュを塗装
定期的なお手入れ	サイクル	一般:1年に1回を目安 重歩行:半年に1回を目安	一般:1年に1回を目安 重歩行:半年に1回を目安	一般:1年に1回を目安 重歩行:半年に1回を目安
	方法	1.表面クリーニング:表面の塵やほこりを掃除機などで除去 2.再塗装:仕上げに使用している同一の塗料を再塗装 *ペーシックオイルはArbor植物オイルを使用 3.乾拭き・自然乾燥:乾いた布で塗料を拭き取り、自然乾燥	1.表面クリーニング:表面の塵やほこりを掃除機などで除去 2.ワックスがけ:Arbor水性クリーナーワックスを10倍に希釈し、雑巾を浸し、固く絞って全体を拭き掃除	1.表面クリーニング:表面の塵やほこりを掃除機などで除去 2.ワックスがけ:Arbor水性クリーナーワックスを10倍に希釈し、雑巾を浸し、固く絞って全体を拭き掃除 3.基本的には不要ですが、塗装が摩耗しやすい箇所(椅子の下など)については部分的に再塗装が必要
注意事項		<ul style="list-style-type: none"> ● 市販のワックスは使用しないでください。 ● 水拭きは毛羽立ちや白濁の原因となるため避けてください。 ● スチームモップ(水蒸気式クリーナー)は、木材の膨張や白濁の原因となるため厳禁です。 ● 薬剤を含む市販のお掃除用品は、変色など不具合の原因となるため使用しないでください。 ● 他塗料への変更はできません。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水を撒いてモップをかけたり、しっかり絞っていない雑巾での水拭き、スチームモップ(水蒸気式クリーナー)は、フローリングの膨張・反り・割れの原因となるため厳禁です。 ● 化学雑巾をフローリングの上に長時間放置すると、フローリングが変色する恐れがあります。 ● メラミンスポンジなどは、塗装膜を傷めてしまうので使用しないでください。 ● 市販のクリーナーやワックス等をご利用になる際は、必ず使用上の注意をよく読み、目立たないところで試してからお使いください。 ● 他塗料への変更はできません。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 市販のワックスは使用しないでください。 ● スチームモップ(水蒸気式クリーナー)は、木材の膨張や白濁の原因となるため厳禁です。 ● 薬剤を含む市販のお掃除用品は、変色など不具合の原因となるため使用しないでください。 ● 他塗料への変更はできません。

浸透性塗料のお手入れポイント

再塗装の頻度について

一般の住宅であれば年に一度で十分です。数年続けて定期的に再塗装を行っていくうちに、徐々に塗料がなじみ落ちていくので、その後は様子をみながら少しずつ再塗装をする期間を延ばしていても問題ありません。頻繁に塗りすぎてしまうとべたつきの原因となり、かえて汚れが付きやすくなってしまふ場合もあるのである程度の期間を空けて行いましょう。

塗装をする範囲について

よく歩く部分や拭き掃除をする部分は塗料の効果が薄れやすいので、そのような部分を重点的に行いましょう。家具の下やお部屋の隅の方など、塗装がとれにくい部分は、大きな家具を移動してまで床全面を再塗装する必

要はありません。無着色の塗料であれば、極端な塗りムラが出ることはありませんが、色、ツヤの違いが気になる場合は全面に再塗装を行ってください。

上手に塗るコツ

塗装の失敗の大半は、塗布量が多すぎたり、乾拭きが不十分によるべたつきです。きれいに仕上げるには、塗り過ぎに気を付けて少量を薄く擦り込むことと、べたつきがなくなるまで、しっかりと乾拭きを行うことを心がけましょう。

木材が吸収できる塗料の量には限りがあるため、塗布量が多すぎるとべたつきの原因になってしまい、汚れが付きやすくなるので逆効果です。

11.無垢フローリングとの付き合い方

無垢フローリングと上手に付き合うための、ポイントをまとめました。魅力的な表情を保つためには、無垢木材への心配りが大切です。長くお付き合いいただくために、下記をご一読ください。

水分・食べこぼし

- 水分は、毛羽立ちや白濁、カビ、ひび割れの原因となります。
- 日常的な水拭きでのお手入れは避け、観葉植物・加湿器・水槽などのお取り扱いには十分ご注意ください。
- 濡れたタオルなど水気を多く含むものを無垢フローリングの上に放置すると不具合が生じる場合があります。
- 結露によって生じた水滴や、洗濯物の室内干しによる湿気などによって不具合が生じる場合があります。
- 醤油・コーヒー・ワインなど色の濃い液体や、ジュース・くだもの・洗剤など酸性度やアルカリ度の高い液体及び固体はシミや変色、色落ちの原因となり得ます。こぼしてしまった際は、素早く拭き取りを行ってください。

直射日光

- 長時間にわたり直射日光が当たると、変色やひび割れが生じる場合があります。日差しの強い場所では、カーテンやブラインドなどで日光を遮ってください。

家具・家電

- 重たい家具やキャスター付きの家具は、ヘコミや傷の原因となります。ピアノなど重たいものを置く場合は、フローリングとの間に板を敷くなどして荷重を分散させてください。脚の裏側にフェルトなどの緩衝材を貼っていただくと、傷がつきにくくなります。
- 無垢フローリングの上に冷蔵庫を直接置くと、熱風が原因でひび割れが生じる場合があります。
- 無垢フローリングの上に直接アイロンを置くと、加熱による不具合が生じる場合があります。

暖房器具

- 無垢フローリングに直接温風が当たると、表面の割れや、隣り合う無垢フローリングとの間に大きな隙間が生じる場合があります。
- ホットカーペットやコタツを使用すると、表面の割れや隙間が生じる場合があります。やむを得ずご使用になる場合は、無垢フローリングと暖房器具の間に遮熱シートを設置してください。

塗装

- 無垢フローリングに、既に施されているものとは異なる市販の塗料を使用された場合、変色などの不具合が生じる可能性があります。基本的には、既に塗布されている塗料と同一のものを継続してお使いください。
- 塗料を過度に塗ると、ベタつきの原因となります。ご使用の際は、少量を塗り伸ばすように塗装してください。
- 塗料が染み込んだウエス(布切れ)を放置すると、まれに自然発火する恐れがあります。ご使用後は、水に濡らして処分してください。

薬品・金属製品

- ヘアカラーリング剤・パーマ液・靴墨は変色する場合があります。ご使用の際は、無垢フローリングに薬剤を落とさないようご注意ください。
- 化学雑巾やモップをご使用になると、変色する場合があります。
- 鉄クギや金属製品を無垢フローリングの上に置いたままにすると、黒色に変色する場合があります。金属製のものを無垢フローリングの上に置く場合は、接触面にフェルトなどを貼り、直接触れないようにしてください。
- ノロウイルスなどの殺菌・消毒に次亜塩素酸ナトリウムを水で希釈したタイプの消毒液を使用する場合は、布などに染み込ませて拭き取りを行ってください。毛羽立ちやシミの原因となる場合がありますが、正しくメンテナンスをすることにより、補修することができます。詳しくは、P13をご参照ください。

※薬品などをご使用になる際は、必ず使用上の注意をよく読み、目立たないところで一度試してからお使いください。

敷きもの

- カーペットやラグなどを無垢フローリングの上に敷いたままにすると、カビやダニが発生する可能性があります。ご使用になる場合は、できるだけ通気性の良い薄手のものをお選びください。
- 床暖房をご使用の場合には、無垢フローリングの上にカーペットを敷かないようにしてください。放熱を妨げ、ひび割れなどの原因となります。
- 床への敷きものは陽の光や空気を遮断し、無垢木材の特徴である経年変化を妨げ、そこに色差が生じます。ご使用になる場合は、できるだけ陽の光や空気になじませて、経年変化に注意してください。

その他

- 車椅子を使用されますと、無垢フローリングに傷が付くことがあります。特に屋外から室内へ入られる際には、砂やゴミを落としてから入るようにしてください。
- ペットの爪によって傷が生じることがあります。また、ペットの排泄物は無垢フローリングを傷める原因となり得ます。長時間放置せず、できるだけ早く拭き取るようにしてください。